

「スイッチOTC薬」の国内市場を調査

花粉症などアレルギー対策目薬、“鋭い効き目”に需要...09年は前年比2.7%増の見込
 高脂血症治療剤「エパデル」(イコサペント酸エチル)がスイッチOTC化へ

総合マーケティングビジネスの株式会社富士経済(東京都中央区日本橋小伝馬町 社長 阿部 界 03-3664-5811)は、医療用医薬品として使用実績のある成分を一般用医薬品(OTC「医薬品」)に転用した医薬品「スイッチOTC薬」の国内市場を調査した。その結果を報告書「スイッチOTC市場の現状分析と将来予測調査2010」にまとめた。 1 Over The Counter

この調査では、薬効領域別に10品目の既存スイッチOTCの市場動向を分析した。また、スイッチOTC候補となっている成分が配合されている医療用医薬品について市場動向やポジショニングを分析すると共に、スイッチOTC化後に期待される市場規模を予測した。さらに、参入企業8社の事例も紹介している。

<調査結果の概要>

1. スイッチOTC市場 2

2009年見込	前年比	2010年予測
1,571億円	102.3%	1,588億円

高齢化に伴って医療費の増大が社会問題化している中で、一般用医薬品による“セルフメディケーション”の推進が活発化している。中でも“効き目の鋭い”スイッチOTCを積極的に展開し、膣カンジダ再発治療薬や口唇ヘルペス再発治療薬といった新規薬効領域の開拓や、生活者のセルフメディケーション意識向上による需要拡大を目指す動きもあり、一般用医薬品市場発展の牽引役としてスイッチOTCへの期待が高まっている。2009年の市場は前年比2.3%増の1,571億円が見込まれる。

2009年6月に改正薬事法が施行され、リスク分類に基づく新販売制度がスタートした。スイッチOTCは第1類が比較的多く、取り扱いが薬剤師に限定されている。適切な情報提供によって安全性の確保が期待される一方、店頭で気軽に買えなくなったという状況も出てきており、一部で販売に影響が生じている。

- 2 医療用医薬品として使用実績のある成分で1980年代以降に一般用医薬品に転用したものを対象とした。そのため、改正薬事法におけるリスク区分で必ずしも第1類とは限らず、その他の分類区分へ移行後の一般用医薬品も対象とした。また、日本国内において医療用医薬品としての使用実績がない“ダイレクトOTC”、新薬効を承認された医薬品、基準外成分を配合した感冒関連薬も対象とした。

2. スイッチOTCの構成比が大きい薬効領域市場(注:市場規模はスイッチOTCのみ)

薬効領域	2009年見込	前年比	スイッチOTC構成比	2010年予測
禁煙補助剤	71億円	92.2%	100.0%	70億円
発毛・育毛剤	150億円	107.9%	98.4%	158億円
水虫薬	114億円	93.4%	94.6%	108億円
血清高コレステロール改善薬	27億円	128.6%	75.0%	31億円

各薬効領域の一般用医薬品市場において、スイッチOTCの構成比が50%を超える市場は、禁煙補助剤、発毛・育毛剤、水虫薬、血清高コレステロール改善薬である(2009年見込)

禁煙補助剤は、2001年発売の「ニコレット」(武田薬品工業)が市場を開拓した。すべてスイッチOTCとなっており、2008年には従来のガムタイプに加えパッチタイプが上市されたことで、市場は2007年の50億円から77億円と大幅に拡大した。しかし、2009年は前年の反動やパッチタイプが第1類であることから店頭での販売に影響が出て減少が見込まれる。今後も70億円程度の横ばい推移が予測される。

発毛・育毛剤は、ミノキシジルを配合した「リアップ」(大正製薬)の発売によって市場が急拡大した。その後は試用需要が一巡して減少したものの、「リアップ」のプロモーション強化やラインナップ拡充で2007年に反転、2009年はミノキシジルの配合を5%に高めた「リアップ×5」が発売されたことで引き続きプラスを維

持する見込みである。今後も「リアップ」が市場を牽引していくと見られ、更なる成長が期待される。

水虫薬は、2000年代前半に塩酸ブテナフィン、塩酸テルビナフィンなどがスイッチOTC化され、早くからスイッチOTCが定着している。近年もラノコナゾールがスイッチOTC化された他、塩酸ブテナフィン、塩酸テルビナフィンの複合剤も登場している。しかし、競合の激化や成分による差別化が難しくなってきたことから市場は縮小傾向にある。

血清高コレステロール改善薬は、メタボリックシンドロームへの関心の高まりを背景に製品数が増加している。2008年は酪酸リボフラビン配合の「ドルチール」(小林製薬)、2009年はパンテチンとソイステロール配合の「コレストン」(久光製薬)が発売されるなど引き続き市場が活性化しており、今後も高成長が予測される。

<注目薬効領域市場> (注:市場規模はスイッチOTCのみ)

1. 外用消炎鎮痛剤

2009年見込	前年比	スイッチOTC構成比	2010年予測
229億円	109.0%	47.3%	228億円

1980年代にインドメタシンが、1990年代中盤にフェルピナクなどがスイッチOTC化された。インドメタシン配合の「バンテリンコーワ」(興和新薬)に加え、2003年に発売されたフェルピナク配合の「フェイタス」(久光製薬)が大幅に実績を伸ばし、以降、インドメタシンに加えフェルピナク成分を配合した製品の発売も相次ぎ市場を牽引すると共に、外用消炎鎮痛剤全体におけるスイッチOTCの構成比も高まった。

2009年は、新たにジクロフェナクナトリウムがスイッチOTC化され、同成分を配合した新製品の発売が相次ぎ、積極的に展開されたため、前年比9%増が見込まれる。しかし、2010年以降の市場は、これまで好調だった反動や、スイッチOTC同士の需要の奪い合いもあり、持続的な成長は難しいと予測される。

2. 感冒関連用薬

2009年見込	前年比	スイッチOTC構成比	2010年予測
675億円	102.4%	47.4%	680億円

総合感冒薬、解熱鎮痛剤、鼻炎治療剤、鎮咳去痰剤を対象とした。スイッチOTC市場の43%を占め最も大きな市場規模となっている(2009年見込)。1980年代前半からスイッチOTC化が進んでおり、2004年以降は新規成分のスイッチOTC化が毎年続いている。2009年は前年比2.4%増が見込まれる。

総合感冒薬は、「ルル」(第一三共ヘルスケア)や「パブロン」(大正製薬)など昔から高いブランド力を維持しているシリーズ製品が安定した実績で市場を牽引している。風邪やインフルエンザの流行が市場の変動要因となっているものの、多様なニーズに応えた製品ラインナップや、各々の特徴を強調したプロモーション展開等によって、緩やかな成長が続いている。

解熱鎮痛剤は、近年新たなスイッチOTC化がなく、イブプロフェン配合の「イブ」(エスエス製薬)や「ナロンエース」(大正製薬)などが好調に推移している。

鼻炎治療剤は、近年スイッチOTC化が進んでおり、フマル酸ケトチフェン配合の「パブロン点鼻Z」(大正製薬)、塩酸アゼラスチン配合の「ハイガード」(エーザイ)、エメダスチンフマル酸塩配合の「アルガード抗アレルギーカプセル」(ロート製薬)など発売が相次いでおり、感冒関連用薬全体の成長を下支えしている。

感冒関連用薬は“効き目の鋭い”スイッチOTCが需要を集めやすい分野であることから、今後も順調な推移が予測される。

3. 目薬

2009年見込	前年比	スイッチOTC構成比	2010年予測
28億円	127.3%	6.8%	31億円

花粉症対策を中心した抗アレルギー点眼薬の市場となっている。1997年にクロモグリク酸ナトリウム、2003年にプラノプロフェン、2007年にフマル酸ケトチフェンがそれぞれスイッチOTC化され、これらを配合した製品数も増えており、成分間やブランド間、更には複合タイプも含め競合が激化している。2009年は前年比27.3%増の28億円が見込まれる。

花粉飛散量の影響を受けやすい市場だが、花粉症患者が増加している中で“効き目の鋭い”スイッチOTCの人気は高く、引き続き高成長を維持していくと予測される。近年、目薬市場ではスイッチOTCやドライアイ訴求など高機能製品が需要を獲得しており、一般用点眼薬を含めた目薬全体市場での存在感が高まっている。

<注目スイッチO T C 候補成分の動向>

1. イコサペント酸エチル【高脂血症治療剤】

高脂血症への認知度の向上やメタボリックシンドロームへの関心の高まりによる受診・治療患者数の増加に伴って、医療用医薬品の高脂血症治療剤市場は拡大しており、2009年は3,659億円が見込まれる。また、中性脂肪値改善訴求の特定保健用食品市場は2009年に693億円が見込まれることから、イコサペント酸エチルがスイッチO T C 化された場合の潜在需要は非常に大きいと考えられる。なお、魚油を精製した製剤「エパデール」の製造販売元である持田製薬は、大正製薬とスイッチO T C の販売契約を締結した。

2. ロキソプロフェンナトリウム【非ステロイド系解熱消炎鎮痛剤】

非ステロイド系解熱消炎鎮痛剤は、幅広い疾患の消炎、鎮痛に使用されている。処方対象が軽度から中等度の疾患であるため、患者数の増減の影響をあまり受けない。2009年の医療用医薬品市場は1,075億円が見込まれる。スイッチO T C 化が承認された「ロキソニン」(第一三共)は非ステロイド系解熱消炎鎮痛剤のトップブランドで医師の評価も高く、スイッチO T C が発売されればインパクトが大きいと見られる。しかし、解熱鎮痛剤では「イブ」や「バファリン」(ライオン)などが高いブランド力を持ち、指名買いも多いことから、これら既存製品との競合が予想される。

3. マレイン酸エナラプリル【降圧剤(A C E 阻害剤)】

降圧剤の処方対象となる高血圧症は代表的な生活習慣病であることから治療患者、潜在患者共に多く、今後も高齢化が進むにつれて患者数が増えていくと見られる。医療用医薬品の降圧剤市場は2009年に8,750億円が見込まれる。現在の一般用医薬品では類似の薬効がないことから、スイッチO T C 化されれば新規薬効領域の開拓として期待される。ただし、2008年のスイッチO T C 促進のための新スキームにおける審議結果は「慎重に進める」として承認は見送られ、近い将来にA C E 阻害剤がスイッチO T C 化される可能性は低い。

<調査対象>

スイッチO T C 候補成分		薬効領域別	企業事例
1. イコサペント酸エチル	11. フルチカソンプロピオン酸エステル	1. 消化器官用薬	1. 大正製薬
2. ロキソプロフェンナトリウム	12. ケトコナゾール	2. 目薬	2. 第一三共ヘルスケア
3. レバミピド	13. チアラミド塩酸塩	3. 外用消炎鎮痛剤	3. 興和新薬
4. ボグリボース	14. フドステイン	4. 水虫薬	4. 武田薬品工業
5. マレイン酸エナラプリル	15. ドンペリドン	5. 育毛剤	5. エスエス製薬
6. ランソプラゾール	16. プロピオン酸アルクロメタゾン	6. その他外用薬	6. 久光製薬
7. アルファカルシドール	17. トラニラスト	7. 感冒関連用薬	7. ノバルティス ファーマ
8. フルルピプロフェン	18. トコフェロールニコチン酸エステル	8. 泌尿器官用薬	8. グラクソ・スミスクライン
9. オフロキサシン	19. コレスチミド	9. ビタミン剤	
10. エピナスチン塩酸塩	20. 塩酸プロピペリン	10. その他	

<調査方法>

富士経済専門調査員による参入企業及び関連業者などへのヒアリング調査を主体に、各種公的データで補足

<調査期間>

2009年11月～2010年1月

資料タイトル	: 「スイッチO T C 市場の現状分析と将来予測調査 2010」
体 裁	: A4判 235頁
価 格	: 100,000円 (税込み105,000円)
調査・編集	: 富士経済 東京マーケティング本部 第二事業部 TEL:03-3664-5831 FAX:03-3661-9778
発 行 所	: 株式会社 富士経済 〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町2-5 F・Kビル TEL:03-3664-5811 (代) FAX:03-3661-0165 e-mail:info@fuji-keizai.co.jp この情報はホームページでもご覧いただけます。 URL : http://www.group.fuji-keizai.co.jp/ https://www.fuji-keizai.co.jp/